

材木屋とエコ 環境 省エネ(第76回) 南紀白浜旅行(後編) 「^{みなかたぐす}南方熊楠記念館」見学

(株)コバリン 奥澤 康文

【南方熊楠】 2日目に見学(9月20日(日))。自然科学系の大天才。ネットの中では、「日本のレオナルド・ダ・ヴィンチ」と呼ぶ人もいる程の傑出した人物。以前より関心を抱いていたので、現地到着後、白浜に記念館がある事を知り急遽見学へ。時々、テレビ等でも特集される為ご存知の方も多いと思います。最近でも、年末の12月19日(火)NHK 教育テレビ、午後10～11時、知恵泉で、「究極日本人」として紹介された。

南方熊楠は、別名、“歩く百科事典”と呼ばれ、明治の前年1867年、和歌山市の裕福な金物商の家に、6人兄妹の次男として誕生。所謂、「写真記憶」と呼ばれる天才的な記憶力で幼少時から神童ぶりを発揮。1884年(17才)、熊楠は大学予備門(現・東大)に入学。同期に、夏目漱石、正岡子規、クラスには幸田露伴がいた、スゴイ時代。

地方から出てきた熊楠は、上野の国立博物館や動物園、植物園等で鼻血が出る程興奮し、学業そっちのけで通いつめ、当然、学業の成績は急降下、自主退学し、田舎の親を仰天させた。その後、米国、英国へ留学(1886～1900年：20才から14年間)。神戸港に兄を出迎えた弟は、ボロの身なりに、何の学位もとらずに書物と標本だけを持ち帰ったことを知り啞然とした。

「ネイチャー」に論文が載ることは研究者の夢だが、熊楠は51回も掲載された。しかも、人種差別が強かった100年前に世界中から注目された。有名な柳田國男が、「南方熊楠は、日本人の可能性の極限だ」と称した。少しだけ調べても、即座に凄まじい記憶力、業績、影響力等がわかる。江戸時代に生まれ、昭和に亡くなった(1941)。享年74才。何という破天荒な人生、天衣無縫さ。館内は写真撮影禁止の為、目を凝らして見学し、その後もネット等で情報を収集しています。



私の見学直後に、改修工事が行われきれいになったとの事。将来又、是非、関連施設、墓地等にも行ってみたい。



昭和天皇の歌碑前にしばし佇む。「雨にけむる神島を見て 紀伊の国の生みし 南方熊楠を思ふ」感慨深い。

記念館を見学後、周辺をぶらぶら散策。気分も晴れ晴れ、体の調子も改善された。前月号で紹介した、「締め殺しの木」(正式名称:アコウ、クワ科、イチジク属)の前を再度通って下山した。何度見ても不思議な木だ。徒歩数分で海岸線に到達。9月下旬の午後で天候も良く、波が穏やかで海岸線がひととき美しく感じた。



海岸の岩は海水できれいに削りとられ、すべすべ。目を近づけると小さい生き物や小魚を観察。打ち寄せるさざ波の音が心地よく、しばし、しゃがみこんでいました。



堆積岩が隆起し、風化作用でポロポロ。元々、地質学に興味があり、何億年の悠久の地球の歴史を思い描き、我々の短い人生を考えさせられた。



近所のユニークな宿。「SOLMARE NANKI」。建物前の「鉄人28号」、「鉄腕アトム」、「バットマン」、「スパイダーマン」等のヒーローが評判。思わず立ち止まり写真撮影。



9月下旬の為、まだ海水浴をしている人もいる。きれいな白い砂浜。夏の盛りを過ぎ人気も少なく、ほんやりと浜辺を散策すると気分が爽快になる。



ホテルからタクシーで、白浜駅へ。半世紀前は、新婚旅行の人気スポットだったという。地元の運転手さんと演歌歌手の坂本冬美さんの話題で盛り上がった。



帰途は白浜から特急で新大阪へ。新大阪で乗り換え、東京に向かう。飛行機を使えばすぐだが、敢えて、新幹線を乗り継ぎ列車の旅を楽しんだ。

今回は風光明媚な観光地で、「南方熊楠記念館」も見学できラッキーだった。久し振りにリラックスでき体調も改善された。何をすることも健康が一番であり、たまには温泉旅行も必要だと感じた。狭い日本とは言え、意外に広く観光名所、温泉、旧跡等も多彩で興味深い。しかし、私は殆ど未経験なのでシニアライフの一環で健康寿命を意識して近隣から旅をしたい。

【平成30年の初めに】 年明けは平年より寒さが厳しく、日本海側では豪雪による事故が相次いでいるが、幸いに関東では晴天が続き気分も爽快。例年通り大宮氷川神社に参拝。昨年来、緊迫する東アジア情勢も心配されるが今年も安全・平和な年を祈願。蜜柑と餅を食べながら実業団と箱根駅伝を見ているうちに正月は瞬く間に終了。

さて、1月5日に富岡八幡宮へも参拝したが、年末の事件の影響は大きく、通常の正月の賑わいは無く、隣接する深川不動堂共々閑散としていたのが残念だ。当然、地元の商店街は大きな影響を受けているようだ。今迄は下町情緒豊かな深川で働いていることがPR材料として使えたが当分無理になり寂しい。

又、相撲界の暴行事件は年を越しても収まりそうにない最中、行司の不祥事も発覚し複雑且長期化している。前月号で記述した、「日本の未来年表」と同様な書籍が色々な出版社から発行され、関心事となっている。多くの問題が指摘され、悲観的な内容になっているが、70～80年前の先人の苦勞を想えば、今は遥かに恵まれている。今のシニア世代には影響が少ないかもしれないが、子や孫の世代には大きな影響が出るというから心配が増幅する。

世界的に見れば、バブル崩壊後の日本の労働生産性が相当低下していると言う。国難を迎えた江戸末期には、南方熊楠はじめ多くの偉人がキラ星の如く輩出した。明治維新150年になる今、そうした才能ある人材や技術革新が真に求められている。粘り強く、したたかに、乗り越えて行くしかない。

2018年1月14日(日)記